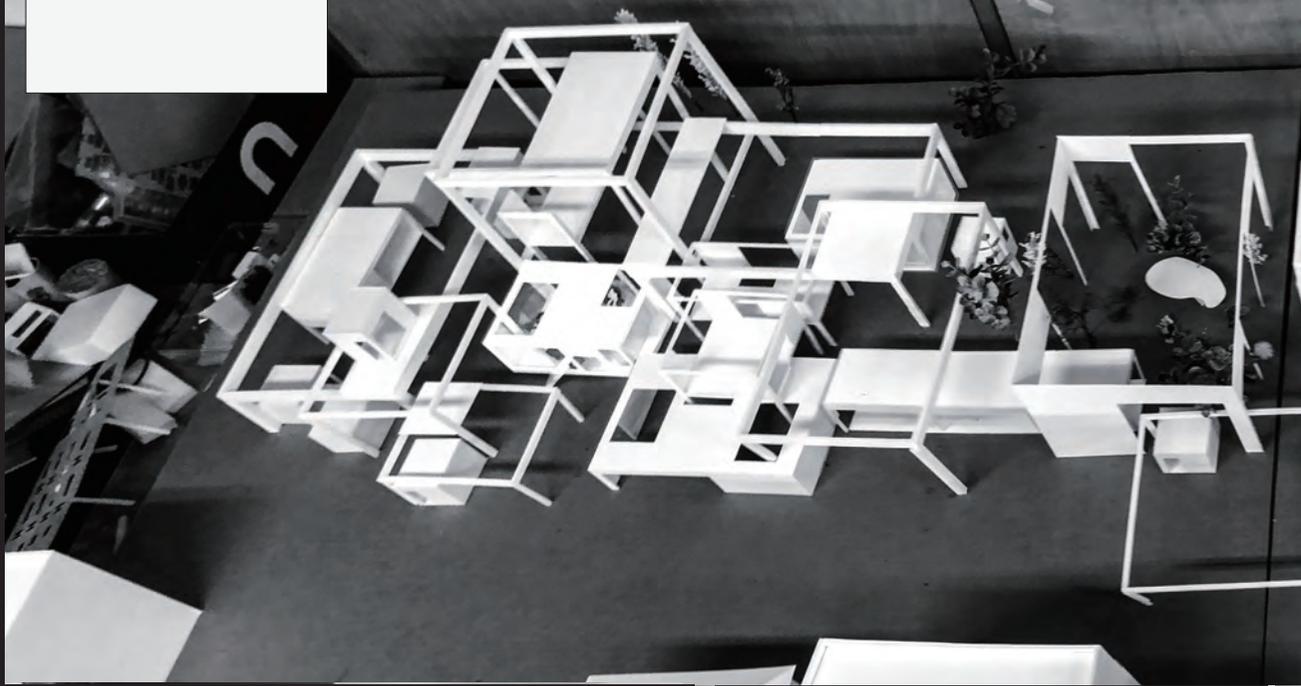


私は設計側のデザイン通りに使われる様な空間より、使う人によって使い倒されている様な空間の方に魅力を感じていた。しかし私自身が設計側である場合、私はその空間を作ることは出来得無い。今回その解決方法として自然界にヒントがあると考えた。私が魅力を感じる生きている様な町や集落、建築といったものは人工であるが、森林や海といった自然界や多細胞生物の細胞の集合に似ていると感じたからだ。他の生物と同様、人々は設計という介入が無くても彼らは自分たちで良い空間を作ることが出来るのではないだろうか。その場合設計者は何を根拠にどこまで何を設計すれば良いのだろうか。



Top-down

50%



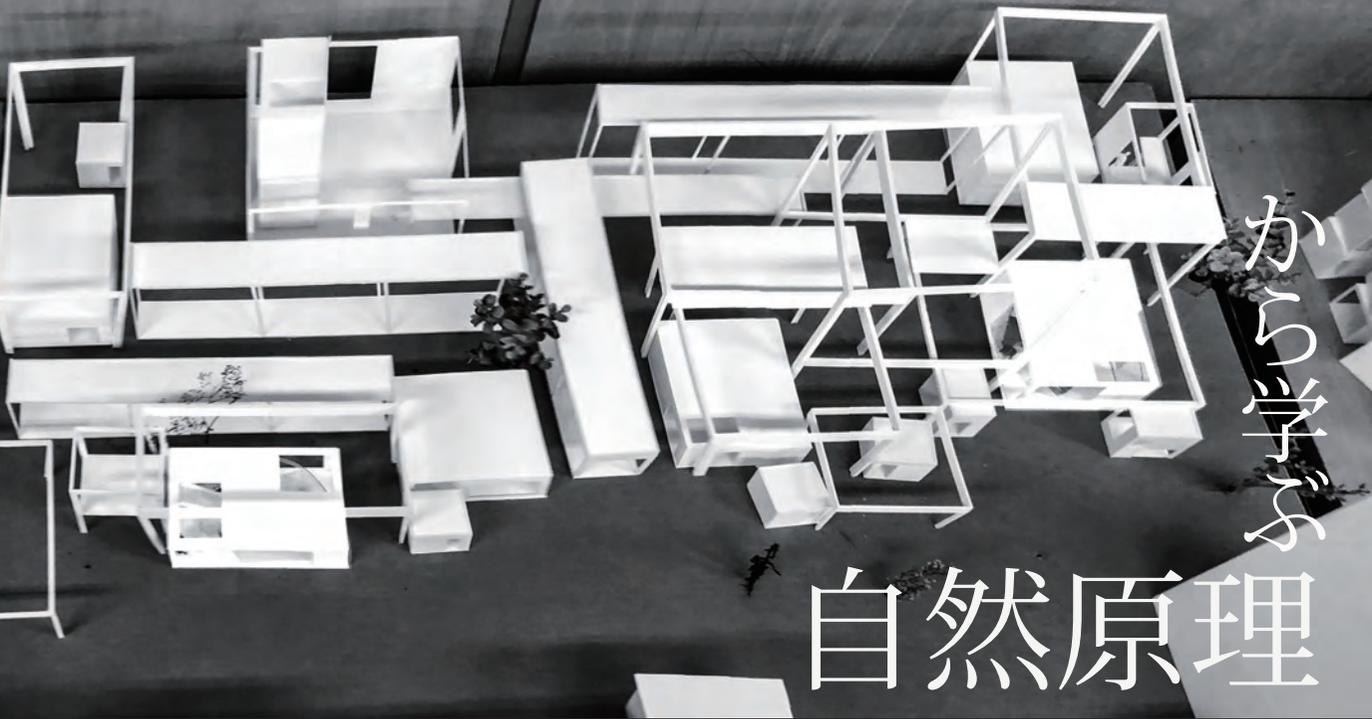
Bottom-up



設計とは

50%

本提案はその答えの一片を知りたいが為の実験である。今回のプログラムは国際学生寮だが、私はその中に自然界における生物多様性と類似性を見た。生物多様性が生まれる原因を考え、建築設計に応用することにした。その結果本提案では、私は建築の半分を設計し、半分を他の建築とは何も関係のない人たちに自分の空間を作ってもらい、どうなるかを試してみた。



から学ぶ

# 自然原理

## Ecosystem



### 多様性による調和

自然空間においては、ある生物がただ個体のみの為に生きているの関わらず、自ずと他の生物に居場所を与えている。生物たちは自分の居場所を見つけて住みこなしていく。そして全体として循環が生まれる。



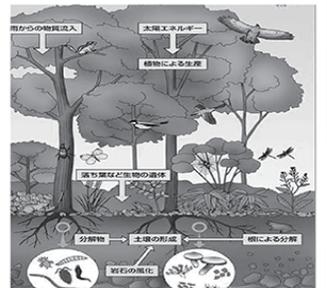
## Analysis

自然空間の分析



### 連鎖と調和

個体群が生きる結果、さらに新たな生物に居場所を与える。この連鎖がなんども起き、全体として調和へ向かっていく。



### 他律の原理

自然空間においては、それぞれの生物が各々の規則に空間を構成する。そこには他者にこうしてあげよう、といった意図は存在しない。(例えば木は自分の生態的条件からあの様な空間を生み出す。そして下位の動植物は住みやすい場所を探すそれが木が意図したことではない)

## Site

横浜市南区大岡2丁目



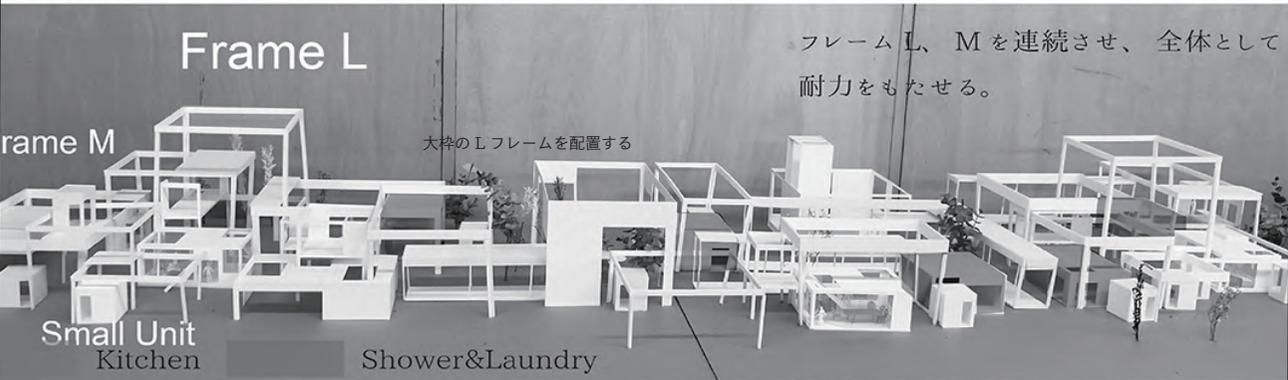
## Program

国際学生寮を考え直す





## 前提条件



梁・柱の大きさが異なるフレームを連続させ構造体とする。構造体には大きさはそれぞれ異なるが、大別してL、M、Sの3種類がある。



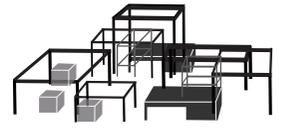
大枠のLフレームを配置する



耐力が持たない箇所を補うかつ他のLフレームと連結させる様にMフレームを配置



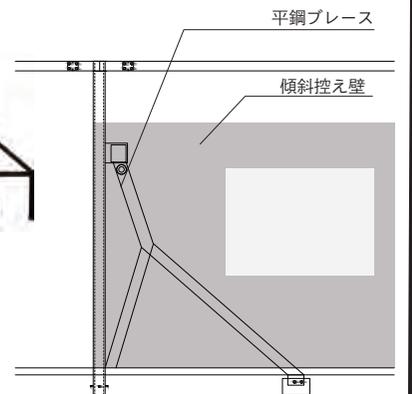
それでも耐力が持たないLフレームの柱の足元にSサイズの部屋を配置



必要最低限の機能(共有キッチン、シャワー・ランドリー室)を配置



共有庭・敷地に現存していた樹木を配置→初期状態の完成



柱の足元を支える様にブレースをかけそれをSサイズの部屋の壁で隠す様にして細い柱を支持

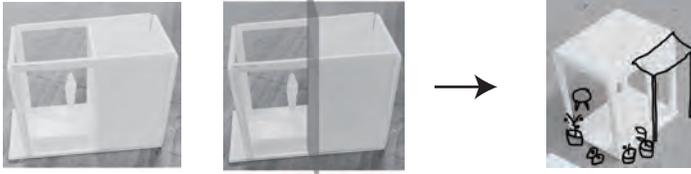
# 意図

設計者(私)の意図を

出来るだけ透明にちかづけていく

# Experiment

人間=モノを使って領域をつくる事が出来る



現在の部屋の大きさの半分にする

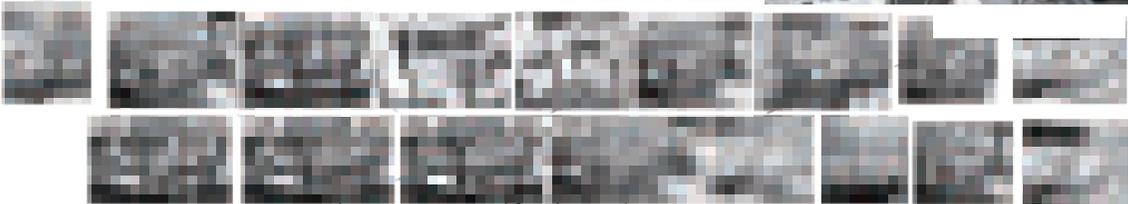
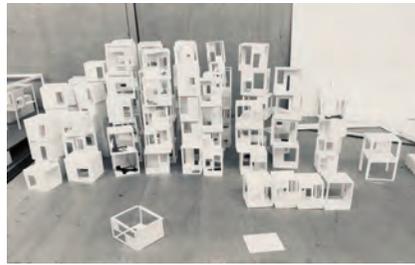
日常生活が外部に漏れ出すだろうモノによって自分の居場所を作るようになるだろう

# 無意図

## を入れる

## 実験方法

- 1 直接寮の人にヒヤリングして自分の住みたい場所に部屋となる箱を置いてもらい、どの様に住むか聴く。
- 2 写真・動画にて上記と同じことをする。



### 30人弱を調査

真ん中であつて、庭もあつて、日当たりが良さそう

リーさんは俺の隣がいい

学校側がいい

玄関に近いのかわいい。こときちゃんとシャワーにも近い

朝の日差しが当たる

壁にたくさんポスター貼りたい。景色いいところがいい

友達と集まりたい。友達の近くがいい

ひとりになれる場所がいい



$\lim_{n \rightarrow \infty} a_n$

極限に飛ばす

…ことは出来無いので

今回は 130 個で実験  
(体力の限界)

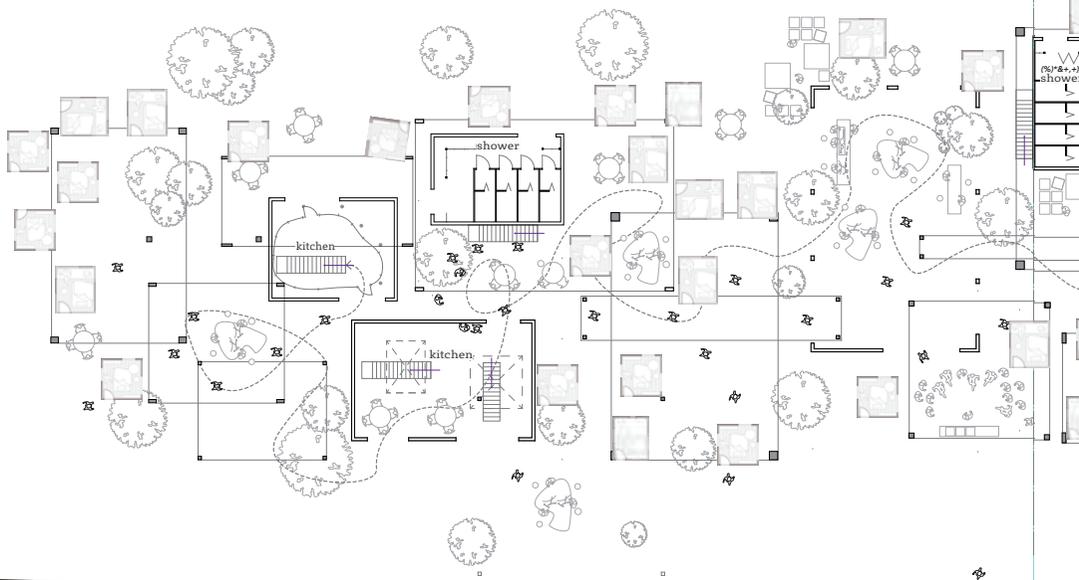
→設計者の手が及ぶことが出来る範囲以上の数で試してみる

# 実験

# Results

## 1st Floor Plan

# 結果



結果として、自分でどこまで設計すれば良いのか少し掴めた様な気がする。

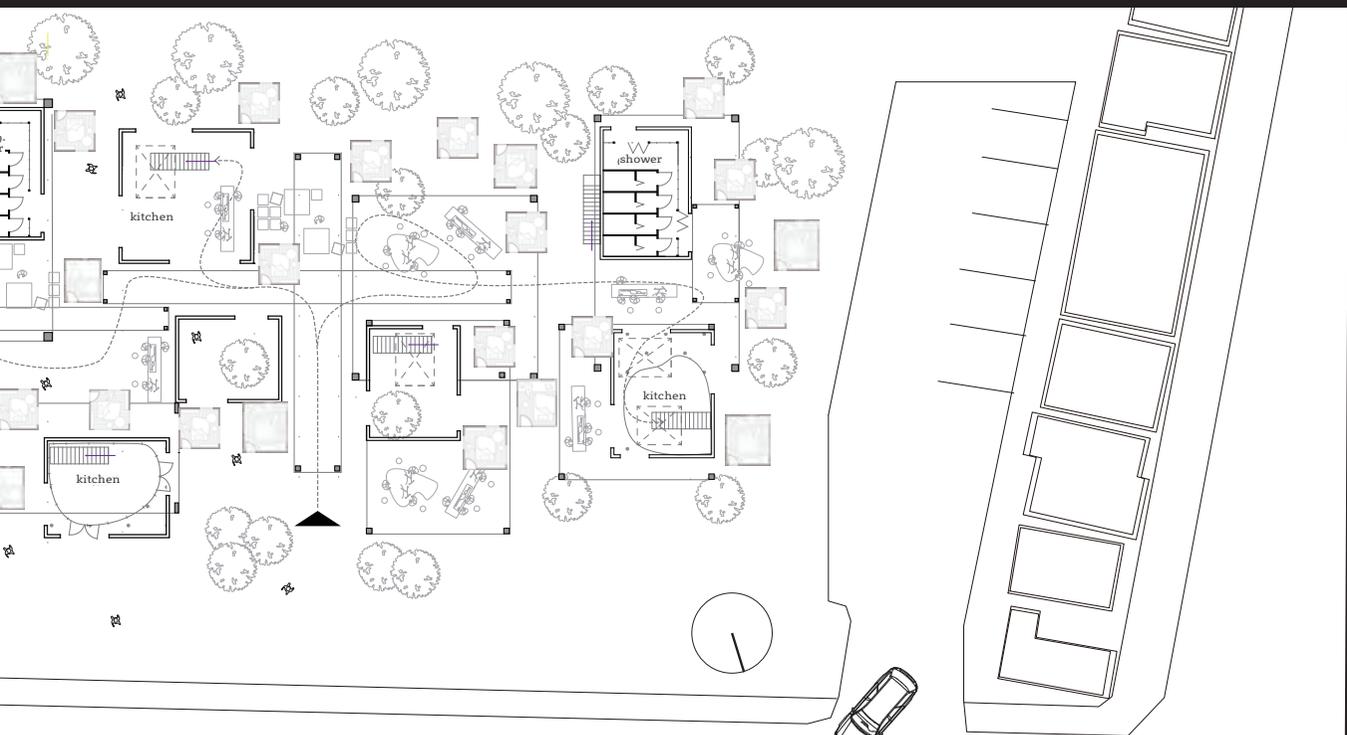
調査に参加してくれた寮の住民たちは、私の予想を超えた住み方を教えてくれた。理由はかなり個人的なものも多く（庭の近くがいいとかこの人と住みたいとか外から景色が見たいとか）

一つ一つみると勝手なのだが、それらが集まっていくと一つのサービスを生み出していくことに気づいた。（本が好きな人どうし集まった場所では本棚の谷ができて小さい図書館に様になっていたり中国人が集まってご飯を食べる場所ができてミニ中華街の様になっていたり、勝手に庇や屋根をかけてそれが下階の住人の日よけにもなっていたりなど）形の作り方は他に正解があったと思うので次はもっと人のアフォーダンスを駆り立てる様な形に挑戦してみたい。私は現代日本の都市や郊外において陰鬱した窮屈な印象を受けるのだが、もしかするとすでに決められたパターンの建築や町を押し付けられていることで、階層の下にいる使う側の人々が彼らの空間に対しての主体性を失い、空間に対して無関心になってしまったのが原因の一つかもしれないと思った。空間自体だけで出来ることは多いのかもしれない。



■ ELEVATION

scale 1-200



今回の提案は、旅先で見えてきた設計者はいないが素敵な町や、建築家なしの建築などの影響から、全部で自分で設計することに対して苦しさがあり、設計側が予期しないことが起きる為にはどの様に設計すれば良いのだろうか、という3年間持ち続けた疑問に挑戦した結果である。以前私は細胞生物学や遺伝子学、生態学などを専攻していたが、細胞の精密な構造と環境の変異を受けても受容できる構造、変化に対して柔軟な仕組みの巧妙さ、複雑な要素が絡み合っ一見カオスに見える中にも実は一定の秩序がある事実がいちいち感動していた。なぜなら人間の頭だけじゃそこまで巧妙には作れないからだ。私たち人間という生物の為にある建築は、生物の中の自然の原理と結びつくことによって、もっと人間に対してより意味のあるものになってくのではないかと考えて、上記の苦しさの解決方法と生物法則が結びついた。あまりに個人的で全然理解してもらえないと思っていたら、意外と色んな方から理解してもらえた。(おそらく捨て身なのが伝わった。) 講評会では何か否定されると自分自身が否定された気になってしまいこれまで二の足を踏んでいた状態だったが、最後に捨て身でやったら少しは伝わる事がわかった。